

Title	西暦1200年前後のドイツの文芸作品に映し出された宮廷的理想像：トマズイン、ハルトマン、ゴットフリートおよびヴォルフラムが見た宮廷世界より
Author(s)	尾野, 照治
Citation	ドイツ文学研究 (1997), 42: 1-31
Issue Date	1997-03-24
URL	http://hdl.handle.net/2433/185425
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

西暦 1200 年前後のドイツの文芸作品 に映し出された宮廷的理想像——

トマズイン、ハルトマン、ゴットフリートおよびヴ
ォルフラムが見た宮廷世界より

尾 野 照 治

1. ドイツ中世、特に 12、13 世紀の宮廷社会の理想は、当時の宮廷道徳を實踐することであつた。しかし宮廷道徳とは稱しても、現代の倫理・道徳とは異なつて、それは緊密に体系化されたものではない。それにもかかわらず宮廷道徳の徳目は、驚くほど頻繁に詩人達の口にのぼる。このような宮廷道徳を考察するにあつては、それを實踐した社会層も視野に入れなければならない。その實踐者は、宮廷貴族であり騎士である。従つて、宮廷道徳を構成しているものは、主に騎士道であると言つてよい。騎士階級は大きく二種類に、即ち世俗的騎士と宗教的騎士に区分できる。しかし世俗的騎士のなかにも、宗教的情熱に溢れた者がいたし、宗教的騎士を標榜する者のなかにも、神と教会のために戦ふことなく、清貧を旨とせず、世俗の利得に走つた者が少なくなかつた。騎士が二種類に大別されるように、騎士道も大きく二種類に分けることができる。世俗的騎士道と宗教的騎士道の二つである。世俗的騎士道の文芸上の中心的ファクターは、なかんづく婦人奉仕である。他方、宗教的騎士道が目標とするところは神への奉仕であり、それを通して最後の審判で、神の国へ召し上げてもらうことである。厳しく宗教騎士道のみを主張する詩人がいる一方で、宗教的騎士道に世俗的騎士道を、うまく調和融合させる詩人もいる。むしろ当時の多くの詩人達は、後者であると言つてよい。即ちドイツ中世の宮廷文芸においては、これら二種類の騎士道の対立は見事に融解し、その対立の痕跡は、

ほとんど見られないほどである。そもそも宮廷社会の様々な営みは、騎士道の理想と深い関係をもつことが期待されるときにはじめて、詩人にとって興味と価値をもつ表現対象となりうる。しかしその場合、詩人達が騎士道の理想として描き出したイメージは、およそ現実性に乏しく、多くが虚構に基づくものである。つまりそのイメージは、ほとんどが現実の裏面から出たものであり、過度の期待に基づくものである、と言っても過言ではない。騎士道が理想とする諸々の徳操は、一般に次のような言葉を用いて表わされている。diemüete「謙虚」 schame「恥じらい」 kiusche「貞節」 triuwe「忠誠」 stæte「揺るがぬ心」 mæze「節度」 hövescheit「宮廷的雅心」 zuht「宮廷風躰」 vuoge「礼儀作法」等。これらの概念で表わされる徳操を一身に体現した人として、詩人達が異口同音に挙げるのは、アーサー王の宮廷に属する、宮廷的礼儀作法を完璧に身につけた理想的な円卓騎士達である。しかし、その円卓騎士達が文芸作品の中で見せたような、超人的な戦いと高尚典雅な宮廷的振る舞いを目ざして、多くの騎士が実際に厳しい自己鍛練に励んだと考えるのは、空想に過ぎる。同様に、貴婦人に永遠の愛を誓っても、思うように聴許を得られず、そのために幾年もの間、恋の苦しみに身悶えする騎士達が多数実在したと考えるのも、妥当性を得ない推測である。¹⁾ それに関連して、当時の世俗的騎士が実際にはどのようなものであったのかを、鋭く描き出した詩人がいる。12世紀後半に活躍したハインリヒ・フォン・メルクである。説教調の文体を特色とするこの詩人は、人の心を根底から揺り動かし、悔悟の気持を深く抱かせる。『世俗の生と死の想い』の中で、修道院の戒律の崩壊、教区司祭の贅を尽くした暮らし、一般信徒の不遜な態度、貪欲な農民の悪徳などを攻撃し、それとともに貴族の乱れた現世的生活態度にも、厳しい非難の矢を向けた詩人である。

swâ sich diu ritterschaft gesamnet,
dâ hebet sich ir wechselsage,
wie manige der unt der behûret habe.
ir laster mugen si nicht verswigen:
ir ruom ist niwan von den wiben.²⁾

《騎士達が集まる所ではどこにおいても、何某が幾人の女と寝たかという卑猥な話のやりとりが行なわれる。彼らは自分の恥になることを、黙っておくことができない。女との色恋沙汰のほかに、自慢する話題がないからだ。》

ハインリヒ・フォン・メルクは、騎士生活の現実を上のように描いたが、これも乱れ過ぎの例であって、一般には多かれ少なかれ騎士道の理想を追求したと思われる。それでは詩人達は、なぜ騎士道の理想を追求したのか。その追求のために作りあげられた宮廷文芸は、なぜ当時の人々を魅了したのであろうか。それは恐らく、聴衆である騎士達にとって、現実逃避の手段になりえたし、精神的向上の手段、更には社会的アイデンティティの手段にもなりえたからであろうと推定できる。即ち、詩人達が楽しげに語る理想的な騎士世界は、あまりに華やかで美しいので、現実の社会の厳しさや人間関係のしがらみを、一時的にでも忘れさせてくれたし、また詩人達が心を高揚させて描き出す宮廷の理想的イメージは、むくつけき騎士達の生活行動に、様々な好ましい影響を及ぼしてくれたからである。更に宮廷生活の醜悪な現実を隠蔽し、騎士達の自尊心をくすぐることによって、彼らを夢見心地にさせることができたし、当時の社会の中での宮廷と騎士の存在意義を、満足感をもって彼ら自身に意識させることもできたからである。

2 12 世紀の教会は、宗教的騎士の理念を、まだラテン語で説いていた。しかし、聖職にある貴族以外はラテン語を解せなかったので、ほとんどの世俗の貴族や騎士達は、その理念をまだ十分には理解できなかった。教会は、世俗を導く義務を負うにもかかわらず、世俗から超越することを第一義と考えた結果である。後にその理念が、民衆語であるドイツ語で説かれるようになると、世俗社会に大きなインパクトを与えることになった。そのような宗教的騎士道を説いた当時の教訓文学の詩人達の中では、トマズイン・フォン・ツィルクレーレが最も重要な詩人の一人と見なされよう。イタリア人で、アキレーアの司教座聖堂の聖職者である彼は、ドイツの宮廷に招かれて 1215 年かその翌年に、騎士用の道徳哲学の教科書とも言うべき『異邦人』を著した。その著書で、ストア哲学とキリスト教倫理学を背景に、騎士の道徳的・宗教的義務を詳しく説いている。

der vihtet niht nâch rîters reht
der den armen man fleht,
und der im nimt sîn guot,
der treit unrîterlichen muot.
gedenket, rîtr, an iuvern orden:
zwiu sît ir ze rîter worden?
durch flâfen, weizgot ir enfit.
dâ von daz ein man gerne lît,
fol er dar umbe rîter wefen?
ichn hânz gehoeret noch gelesen.
wænet dar umbe ir rîter sîn,
durch guote spîfe und guoten win?
dar an sît ir betrogen gar:
jâ izzet daz vihe gern, deift wâr.
durch kleider und durch schoene gefmît
sît ir niht rîter: fwerz git
eime gebûren, er wirftz niht hin.

jâ hât der gouch wol den fin,
ob man im ein schellen bint zem vuoz,
daz er fi hin tragen muoz.³⁾

《哀れな人を打ち殺す者は、騎士の正義を求めて戦ってはいない。哀れな人から財産を奪う者は、騎士にあるまじき心を抱いている。騎士達よ、あなた方の義務のことを思い返すがよい。あなた方はどうして騎士になったのか。決して眠りを貪るためではないであろう。寝ることが好きだから、騎士になったのではないであろう。そんな馬鹿なことを、私は聞いたことも読んだこともない。あなた方は、グルメの食事と美味しい酒のために、騎士になったと思うのか。そうだとしたら、全くの見間違いだ。まことに、畜生でさえも喜んで食べるではないか。あなた方は、衣装や美しい装身具のために、騎士になっているわけではない。そんなものは、百姓にくれてやればありがたがる。あるいは道化だったら、足に鈴を結びつけてもらおうと、それを身につけるのが当然だと思ひ込むだろう。》

Swer wil rîters ambet phlegen,
der muoz mêre arbeit legen
an fine vuor dan ezzen wol:
mêr ze tuon er haben fol
danne tragen schoene gewant
und varen fwingent fine hant.
der mac niht rîters ambet phlegen,
der niht enwil wan famfte leben.
fwelich man müezec ift,
der ift unmüezec zaller vrift,
wan er gedenket lihte daz,
daz im wær ze houwen baz.

Dehein man fol müezec fîn:
fwer müezec ift, der machet fchîn
daz muoze dicke unmuoze bringet,
fwenner mit ungedanken ringet.⁴⁾

《騎士の努めを果たそうとする者は、たらふく食べることよりも、むしろ騎士としての行動にもっと労力を注がねばならぬ。騎士たる者には、美しい衣装を着たり、手を振りながら派手に行動することよりも、もっとなすべきことがある。安楽に暮らすことばかり望む者は、騎士の努めを果たすことはできぬ。無為に過ごす者は、かえっていつもあくせくしているものだ。考えなくてよいことを、暇にまかせて考えがちであるからだ。いかなる人も、無為に過ごしてはならぬ。無為に過ごす人は、くだらないことを考えて頭を悩ますとき、無為がしばしば多忙をもたらすものであることを、明らかにする。》

Wil ein rîter phlegen wol
des er von rehte phlegen fol,
fô fol er tac unde naht
arbeiten nâch fîner maht
durch kirchen und durch arme liute.
der rîter ift vil lützel hiute
die daz tuon: wizzet daz,
fwerz niht entuot, ez wære baz
daz er ein gebûre wære,
er wære got niht fô unmære.
ir fult daz vür wâr wizzen,
im wirt fîn rîterfchaft verwizzen,
fwer fîn rîterfchaft fô hât
daz er nien git helfe unde rât.

er wirt dar umbe ouch gemuot,
der dem man unrehte tuot.
dâ bî muget ir wizzen wol
waz ouch dem gefchehen fol
der felbe unrehte tuot:
ich wæn er wirt noch mêt gemuot.⁵⁾

《騎士たる者は、当然なすべき努めを十分に果そうと思うのなら、日夜全力を尽して、教会と貧者のために働かねばならぬ。しかし、そのように努めを果す騎士は、今日では非常に少ない。騎士の努めを果さない者は、百姓になる方がよいと心得よ。百姓なら、神にとってそれほど厭わしいものではないから。助けや忠告を人に与えられない野暮な騎士なら、騎士身分の誹りは免れない。そのことを、あなた方はとくと心得よ。更に、他人に不正を働く騎士も、それゆえ苦しめられる。その場合、自ら不正を働く者にも、どんなことが起るか、あなた方は十分に知ることができる。思うにその騎士は、不正を受けた相手よりも、もっと苦しめられよう。》

トマズインの教訓詩ほど教育的意図が明瞭に表現された詩は、他にほとんど見あたらず。騎士が遵守すべき倫理の基礎を確立し、騎士に道徳的自覚を促すことが、この詩人の大きな目標である。それゆえ、乱れた騎士の行動を改善し、世俗的騎士道を非の打ち所がないものにするために、それを宗教的騎士道と融和させる必要があった。華美を極め贅を尽くして、安逸な生活におぼれる騎士など、およそ騎士と呼ぶことはできぬ。安穩無為を避けて、教会と貧者を助けるために全力を尽くすのが、騎士たる者の努めなのだから。それゆえ哀れな人から財貨を奪ったり、そのような人を惨殺したり、あるいは他人に不正を働くような人は、到底模範的な騎士にな

る資格はない。騎士道を自覚させ徹底させるために、このようなキリスト教倫理を説くのは、ひとりトマズインのごとき聖職に就いている教訓詩人だけではない。世俗の詩人が歌って、十字軍に参加することを促した聖戦の歌にも、その倫理は確実に見てとれる。ドイツ中世の叙事詩人や叙情詩人の中で、最も洗練された明晰かつ聡明な言葉を駆使する詩人ハルトマン・フォン・アウエは、彼の最も有名な十字軍の歌の中で、宗教的騎士道の理念を、揺るぎない確信のもとに情熱的に説いている。

Dem kriuze zimet wol reiner muot
und kiusche site,
sô mac man saelde und allez guot
erwerben dâ mite.
ouch ist ez niht ein kleiner haft
dem tumben man,
der sinem lîbe meisterschaft
niht halten kan.
Ez wil niht, daz man si
der werke dar under vri.
waz touget ez ûf der wât,
der sîn an dem hêrzen niene hât?⁶⁾

《十字の印には、清らかな心と汚れなき生活が似つかわしい。それによって、天上の至福と好ましきもの一切を獲得することができる。十字はしかし、自分を抑制できない未熟者には、小さな枷にすらならぬ。十字は、それを身につけている人が、勝手に振る舞うことを望まぬ。十字を心の中に印すのでなければ、それを衣服につけたところで、何の役に立つであろうか。》

Nu zinsent, ritter, iuwer leben

und ouch den muot
durch in, der iu dâ hât gegeben
beidiu lip und guot.
swes schilt ie was zer welte bereit
ûf hôhen prîs,
ob er den gote nû verseit,
der ist niht wis.
Wan swem daz ist beschert,
daz er dâ wol gevert,
daz giltet beidiu teil,
der welte lop, der sêle heil.⁷⁾

《さあ騎士達よ、あなた方に命と財貨の両方を下さったお方のために、あなた方の命も心も貢ぎなさい。現世で高い誉れを得るために、かつて楯を手にとった者が、神のために今その楯を用いるのを拒むならば、決して賢明とは言えぬ。というのは、騎士が正しく振る舞うことができるならば、現世の誉れと魂の平安の両方を手に入れることができるのだから。》

十字の御印を胸につけることは、世俗の名誉と財貨をふり捨て、神の戦士となって聖戦に参加することを、象徴的に示している。聖戦に参加した暁には、必ずや神の祝福を得て、かつて所有していた以上の名誉と財貨を授けられ、神の国へ召し上げられることが約束される。但し、十字の御印を胸につける騎士は、神に帰依する心がくもりなく清らかであることを求められる。そのとき衣服につけられた十字の御印は、神意によって騎士の清らかな心の奥深くにまで浸透していく。心奥に十字の御印を写した騎士は、神のために働く宗教的騎士である。このように見るとき、そこではまるで文芸上の虚構が、全く意識されていないかのようだ。異教徒に包囲されたエルサレムの聖墓を奪回するために、今こそ立ち上がらなければ、神

によって救われることのない愚かな騎士となる。速やかに正しい選択をして聖戦に参加する騎士は、現世の名誉と彼岸での魂の平安をとともに得られる。このように声を大にして主張する詩人は、全く心が揺らぐことがない。これほど誠実な心の訴えかけには、だれもが感動を禁じえなかった。十字軍の歌の多くは、恋人への愛を選ぶか、神への奉仕を選ぶかという二者択一の迷いを大きなテーマとするが、ハルトマンの十字軍の歌には、そのような迷いが感じられない。その迷いのなさが、詩人の明晰かつ聡明な言葉を、更にいっそう際立たせていると言ってよい。

トマズインは、貧者を助け教会を守ることが、徳操にかなう騎士の努めであると教える。同様にハルトマンも、騎士たる者は心と行ないを清らかに保ち、ひとえに神への奉仕に邁進すべきであると説く。この両詩人のように、いかにも生真面目に騎士道を宗教的に説く詩人もいるが、たいていの詩人は、宗教的騎士道と世俗的騎士道とを融和させている。この変容は、詩人達が聴衆を煽動するために意図したものではなくて、むしろ聴衆が求める方向に詩人達が歩み寄った結果と見てよい。心を絶えず神に向け、最後の審判で神の国へ召し上げてもらうために、自ら行動を厳しく律する。そのような宗教的義務を、世俗的騎士道の中心的要素である婦人奉仕に、うまく融合させた詩人達は少なくない。そのような詩人達の中に、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハがいる。この詩人は最も独創性に富んでおり、しかも深く内省的である。大胆とも言える表現形式の多様な作品『ヴィレハルム』の中で、高い騎士精神と信仰の情熱的な力とを、溢れんばかりに示した。

ein ieslich riter siner ere
gedenke, als in nu lere,
do er dez swert enphienc, ein segen:

swer ritterschefte wil rehte phlegen,
der sol witwen und weisen
beschirmen von ir vreisen:
daz wirt sin endelos gewin.
er mac sin herze doch keren hin
uf dienst nach der wibe lon,
da man lernet sölhen don,
wie sper durh schilde krachen,
wie diu wip dar umbe lachen,
wie vriundin vriundes unsemftekeit
semftet. zwei lon uns sint bereit,
der himel und werder wibe gruo^z.⁶⁾

《騎士たる者はだれでも、剣を授かったときに受けた祝福の言葉が今なお教えてくれているように、自分の考えを名誉に向けるがよい。騎士道を正しく行なおうとする者は、寡婦と孤児を苦難から護ってやらねばならぬ。そのようにすれば、永遠の報酬が得られるのだ。更に騎士は、婦人からの報酬を求めて、心を婦人奉仕に向けるもよし。すると槍がどれほど激しく楯を破るか。婦人がそのことをどんなに楽しそうに笑ってくれるか。そして恋する男の焦がれの苦しみを、婦人がどのように鎮めてくれるのかということもわかってくる。天国と貴婦人の寵愛という二つの報酬が、私達に用意されているのだ。》

宗教者トマズィンは、婦人奉仕に触れないままに、騎士が十字軍に参加する重要性を、神学に基づいて詳しく説く。神の国へ招いてもらうためには、郷里に留まらずに聖地へ赴き、異教徒と戦うことが早道である。異教徒から聖地を奪回するために、これまで蓄えてきた財貨や名誉を失うことがあっても、神のもとでそれ以上のものを与えられる。またそこで命を失

うようなことがあっても、神のもとで永遠の命を与えられる、と慰めた後で、ハルトマンの主張と同じように、十字の御印が意味するものを、次のように説き明かす。

fin liebe sol uns noeten
daz wir unfer sünde verderben
mit fim kriuze, dran er wolde sterben
durch unfer aller miffetât.
fwen Kriftes zeichn gezeichnet hât,
den sol ouch kriuzen fin kriuze.
er wil daz man sich alfo kriuze
daz man fim libe volge niht.
fwelhem kriuzer daz geschiht
daz er volget finem zorn,
der hât fins herzen kriuze verlorn.
Kriftes kriuze hât die kraft
daz ez vertreit dehein vintſchaft,
in fwelhem herzen ez ift:
wan felbe unfer herre Krift
bat amme kriuze und amme tôt
umb daz volc daz in marterôt,
daz in fin vater vergæb die schulde
und liez fi haben fine hulde.⁹⁾

《私達皆の咎のためにキリストがそれにかけて死のうとなさった十字架のお蔭で、私達が自分の罪を消滅できるよう、キリストの愛は私達を強制して下さるべきだ。キリストの十字の御印が衣服に縫いつけてある人の心の中にも、キリストの十字架は御印を刻みつけるべきである。人が自分の肉欲に従うことのないように、心に十字の御印を刻みつけることを、キリストは望んでおられる。自分の怒りに従う十字軍戦士は、心の十字架を失っている。

キリストの十字架は、どの人の心の中にあるかと、敵意に耐え忍ぶ力を有している。というのは、私達の主キリスト御自身は、十字架にかけられ死を迎える時に、自分を苦しめた民衆のために、キリストの父に民衆の罪を許して下さいようお願いして下さい、民衆に慈愛をお与えになったのだから。》

3 騎士の宗教的な数々の徳目は、詩人達によってしばしば列挙される。しかしそこには、緻密な体系や秩序と言えるほどのものはうかがえない。それぞれの詩人によって徳目の重点の置き方が異なるし、一人の詩人においても、いくつかの作品の中で、同じ徳目に対する評価が異なる場合がある。宗教的徳目の中で、概して詩人達が大きな重点を置いているのは、diemüete「謙虚」や triuwe「忠誠」である。更に schame「恥を知る心」、kiusche「貞節」そして stæte「揺るぎなき心」と mæze「節度」等も、先の二つに劣らず重要視された徳目である。これらのうち、いずれが伝統的な世俗倫理に属し、いずれがキリスト教の戒律から受け入れられた新しい宗教倫理に属するのか。このような観点から、諸々の徳目をそれぞれの倫理に画然と組み込むのは、決して容易なことではない。いずれにせよこれらの徳目は、必ずしも宮廷道德にのみ属するものではない。それはむしろ騎士一般が、どこにおいても守るべきものとして提示される。宮廷の優雅な習慣や礼儀作法を表わす徳目よりも、それらをも包含する一般的徳目の方を、先に確認しておかなければならぬ。

年若い見習いが正式の騎士にとりたてられるときには、心に絶えず diemüete を抱くようにと主君から諭される。その場合の diemüete は、騎士になれたからといって、傲岸不遜な態度を取ってはならぬとの戒めである。更に、騎士としての義務を遂行できたとき、なかでも特に熾烈な戦いに勝利できたときには、神の恵みを正しく認識すべきであるとの教えて

ある。それゆえ個人の身勝手な判断で行動してはならず、常に神を畏れ敬いながら、敗北した敵に寛大な処置を与えるべきである。更に貧しい人々や苦しんでいる人々に同情し、すすんで援助の手を差しのべる態度も、その diemüete の概念に含まれている。ヴォルフラムの『パルツィヴァル』の中で、グラーハルツの領主グルネマンツは、愚かしい態度を示すパルツィヴァルに、まずは diemüete の必要を説いた。

ist hôch und hoeht sich iuwer art,
lât iuweren willen des bewart,
iuch sol erbarmen nôtec her:
gein des kumber sît ze wer
mit milte und mit güete:
vlizet iuch diemüete.¹⁰⁾

《あなたの品性が高潔であるなら、そして高潔にされるなら、多くの困っている人々に、憐れみの心を持ってあげておられることを忘れないように。その人たちの苦しみに対しては、物惜しみしない心と親切な心で守ってあげなさい。つまり謙虚であるように努めなさい。》

同様にゴットフリートの『トリスタンとイゾルデ』においても、マルケ王は甥のトリスタンの世話を引き受けてから、彼を騎士にとりたて、剣を佩かせ拍車を付けてやる。そのとき王はトリスタンに、高貴の家柄であることを絶えず念頭に置きながら、diemüete を忘れることのないようにと厳しく諭した。

»sich« sprach er »neve Tristan,
sît dir nû swert gesegenet ist

und sît dû ritter worden bist,
nû bedenke ritterlichen pris
und ouch dich selben, wer dû sis.
dîn geburt und dîn edelkeit
sî dînen ougen vür geleit.
wis diemüete und wis unbetrogen,
wis wârhaft und wis wolgezogen;
den armen den wis iemer guot,
den rîchen iemer hochgemuot;¹⁾

《「いいかね、わが甥トリスタンよ」とマルケ王は言った。「そなたの剣ははらい清められ、そなたは騎士になったのだから、騎士の誉れのことをよく考えて、そなた自身がどんな人物であるかということ、忘れてはなりませんよ。自分の生まれと自分が高貴であることを、いつも意識していなさい。謙虚でかつ正直、誠実でかつ礼儀正しい人でありなさい。哀れな人々にはいつも親切に、権勢を誇る者らにはいつも心ばえを高く保ちなさい。』》

封建制度のもとで最も多様な使われ方をする triuwe は、本来は法制用語である。文芸に用いられた場合の概念としては、騎士が道徳的な諸々の義務を誠実に守ることを表わす。schame は、いかなる場合にも恥じる心を失ってはならぬとの教えである。ヴォルフラムの『パルツィヴァル』の中で、キングリムルゼルがアルトゥース王の御前に現われ、円卓騎士の一人ガーヴァーンに対して一騎討ちを申し入れる。そして立派な騎士にふさわしい schame と、高貴な triuwe が備わっていることを明らかにするために、この申し入れを是非とも受け入れるようにと迫る。

kan sîn lîp des niht verzagen,

ern welle dâ schildes ambet tragen,
sô mane ich in dennoch mêre
bî des helmes êre
unt durch ritter ordenlichez leben:
dem sint zwuo riche urbor gegeben,
rehtiu scham und werdiu triuwe
gebent pris alt unde niuwe.¹²⁾

《ガーヴァーン殿に、楯をもつ騎士としての役目を果たそうという
う気があるのなら、兜の名誉にかけて、また騎士の誇り高い命の
ために、私は彼にもっと警告をしておこう。騎士のこのような命
には、地代を生み出す豊かな二つの領地が与えられている。この
二つの領地とは、恥を知る正しい心と高貴な誠実のことで、それ
らは昔も今も、誉れを生み出してくれるものなのだ。》

stæte ならびに mæze については、聖職に就いている教訓詩人トマズィンが、その『異邦人』の中で、unstæte および unmæze とそれぞれ対照させながら、きわめてふさわしい定義づけを行なっている。stæte を守るならば、諸々の tugent が身につく。しかしその場合には常に、mæze が機能していなければならない。stæte と mæze は、同一の徳操から生まれた姉妹であるからだと言う。この主張からも、トマズィンが『異邦人』を、騎士の道德観を高めるために、道德の教科書として著したことが顕著に見とれる。

ich wil daz man fin arbeit
alrêft an die stætekeit
wende, fô gewinnt man baz
die andern tugende, wizzet daz.
die andern tugende fint enwiht,

und ift dâ bî diu ftæte niht.
niemen mac die ftæte hân,
ern well di unftætekeit verlân.¹³⁾

《人はまず、揺るぎなき心に努力を傾注してもらいたい。そうすれば他の徳操も、もっとよく身につけられる。あなた方はそのことを心得ておきなさい。そのとき揺るぎなき心がなければ、他の徳操は無用の長物である。移り気を捨て去ろうとしなければ、揺るぎなき心を守ることはできぬ。》

ich hân von der unftætekeit
mit dîner helfe vil gefeit,
von der ftæte und von der mâze:
die unmâze ich niht verlâze,
wan von der hân ich ouch gefeit,
fi ift fwefter der unftætekeit.
ftæte und mâze fwefter fint,
fi fint einer tugende kint.¹⁴⁾

《私は大いにあなたの助けを得て、移り気、揺るぎなき心、そして節度について語った。節度の無さについても、言い落としてはいない。節度の無さが移り気の妹であるということも語ったのだから。揺るぎなき心と節度は姉妹であり、同じ徳操から生まれた子なのだ。》

トマズインは更に、『異邦人』の「第 8 の書」で、次のように主張を発展させていく。mâze を厳格に守りさえすれば、unmâze によって惹き起こされる諸々の不徳を避けることができる。つまり diumuot「謙虚」あるいは senfte「穏やかな心」は、hôhverte「思いあがり」と blædekeit

「弱気」を遠ざけることができる。einfalt「単純素朴」は, kündekeit「狡猾」と nerrescheit「愚かさ」を, milte「物惜しみしない心」は, sîn guot vewerfen「浪費すること」と arc sîn「吝嗇であること」を避けることができ, 節制をすれば, vil trinken「過飲」と durst「渴き」を, 更に vraz「むしゃぶり食うこと」と hunger「飢え」をも, 消し去ることができる。同様に niht versagen siner konen sînen lîp「夫婦のほどよき営み」は, unkiusche「淫ら」と禁欲のしすぎを, dem reht volgen「裁きの遵守」は, zorn ân gnâde「仮借なき怒り」と ze vil vergeben「許しすぎ」を, そして dultekeit「忍耐」は, unruoche「なおざり」や zageheit「臆病」や trâkeit「怠惰」を避けることができる。

しかし, トマズインがここで教える戒め, つまり生活のあらゆる面で節度を守り, 常に過不足なく中道を歩んでいくようにとの戒めは, 当時のどの詩人の教訓詩にも, 多かれ少なかれ見られる。このような教訓は, 勿論騎士にのみ向けられるものではなく, 貴婦人に対しても同様に説かれる。ゴットフリートの『トリスタンとイゾルデ』の中で, マルケ王から逢引を禁じられた妻のイゾルデは, 禁じられたがゆえになお一層激しくトリスタンを求める。逢瀬が発覚すれば, イゾルデはすっかり名誉を失墜する。しかし, 女としての性に反してまで, 名誉と肉体を冷静に守ることは, どのような女性にとっても不可能に近い。イゾルデは焦がれの苦しみの中で, 名誉と肉体の二律背反に懊悩する。そのとき詩人は折衷案を提示して, 節度さえ失わなければ両方とも保持することが可能だと説く。

ezn ist niht ein biderbe wîp,
 diu ir êre durch ir lîp,
 ir lîp durch ir êre lât,
 sô guote state sô sî des hât,
 daz sî si beidiu behabe.

engê noch dem noch disem abe,
behalte si beide
mit liebe und mit leide,
swie sô si'z ane gevalle.
weiz got si müezen alle
stigen in ir werdekeit
mit micheler arbeit.
bevelhe unde lâze
ir leben an die mâze.
dâ besetze ir sinne mite,
dâ ziere mite lip unde site.
mâze diu hêre
diu hêret lip und êre.
Ezn ist al der dinge kein,
der ie diu sunne beschein,
sô rehte saelic sô daz wîp,
diu ir leben unde ir lip
an die mâze verlât,
sich selben rehte liebe hât.¹⁵⁾

《肉体と名誉の両方を保持する好機に恵まれながらも、肉体のために名誉を見捨てたり、あるいは名誉のために肉体を見捨てたりする女性は、立派な女性とは言えぬ。どのようなことになろうと、喜びと悲しみを受けいれながら、肉体と名誉を見捨てずに両方とも保持するがよい。苦労を重ねることによって、立派になっていくものなのだ。自分の生活を節度に委ね、節度に従ってよく考え、自分自身と自分の振る舞いを節度で飾るがよい。高貴な節度は、その人自身と名望とを崇高なものにしてくれるのだ。自分の生活と自分自身を節度に委ねながらも、自分自身を真に尊重する女性ほど神の恵みを受けているものは、他には天が下になにも存在しない。》

4 キリスト教の伝統的教義によれば、人としての最高の幸福は、現世の快樂への欲求を断ち切ってひとえに神に仕え、最後の審判を経て神の国へ召し上げられることである。それでも人々はこれまで、易きについて現世の快樂を選び取るか、それとも苦しみに挑んで永遠の生の至福を目ざすかに、悩み迷ってきた。宮廷詩人達は中世のこの当時、伝統的な二者択一を迫られながら、他方で新しい道をも模索した。それは神の御心に沿いながら、同時に世俗の喜びをも享受するという妥協の道である。宮廷の華やかな世俗性をにがにがしく思っているキリスト教会に対して、詩人たちは自己矛盾とも言えるこの新しい道を提示した。世俗の宮廷文化を擁護する詩人たちは、自分達の主張を維持しながら生活を支えるために、キリスト教会の批判を巧みにかわして、新しい理想像の旗を高く掲げる必要があった。そのために、教会側の宗教道德の要求と、宮廷側の世俗道德の要求を見事に調和させて、新しい倫理をうちたてた。ゴットフリートは『トリスタンとイゾルデ』の中で、そのような両者のバランスをはかった教えを、*morâliteit* という概念語で表現する。アイルランド王妃の巧みな医術によって、致命傷を治してもらったトリスタンは、王妃の娘イゾルデの家庭教師を引き受ける。そこで彼は、音楽や外国語の指導とともに、典雅な礼儀作法をも丁寧に教えた。そのとき詩人が挙げる *morâliteit* は、幸福をもたらす清らかな教えで、これが身に備わった人は礼儀作法に通じ、心は美しく清純に、振る舞いは好ましく立派になるという。それゆえこの教えは、神の意に沿うものであり、世俗の人々の期待にも応えうるものである。「世にも神にも調和するもの」であり、「神にも世にも気にいってもらえるもの」である。つまりこの教えは、神からの要求も世俗からの要求も、どちらをも満たす大きな徳操と解してよい。

under aller dirre lère

gab er ir eine unmüezekeit,
die heizen wir morâliteit.
diu kunst diu lêret schoene site.
dâ solten alle vrouwen mite
in ir jugent unmüezic wesen.
morâliteit daz süeze lesen
deist saelic unde reine.
ir lêre hât gemeine
mit der werlde und mit gote.
si lêret uns in ir gebote
got unde der werlde gevallen.
s'ist edelen herzen allen
ze einer ammen gegeben,
daz sî ir lipnar unde ir leben
suochen in ir lêre.
wan sîne hânt guot noch êre,
ezn lêre sî morâliteit.
diz was ir meiste unmüezekeit
der jungen küniginne.
hie banekete s'ir sinne
und ir gedanke dicke mite.
hie von sô wart si wol gesite,
schône unde reine gemuot,
ir gebaerde süeze unde guot.¹⁶⁾

《これらすべての教えと並んで、トリスタンがイゾルデに教えたことがもう一つある。それを私達はモラリテートと呼んでいる。これは典雅な作法を教えるものであって、すべての婦人は若い時に、これに没頭すべきであろう。この素晴らしい教えモラリテートこそは、幸福をもたらす清純な教えであって、世にも神にも調和するものである。それは掟の中で、神にも世にも気に入ってもらえる道を、私達に教えてくれる。その教えは、すべての高貴な

心に、乳母として差し出されている。それら高貴な心が、自らの生命の糧と生命の力を、その教えの中に求められるようにと。なぜなら心の高貴な人たちは、もしモラリテートの教えを受けないのであれば、財貨も名誉も得られないからである。この教えこそ、若き王女が最も努め励んだものである。これによって王女は、しばしば自分の心と考えを鍛練し、そのお陰で彼女は見事なほど礼儀正しくなり、心は優美で清純に、振る舞いは好ましく立派になった。》

ヴァルター・フォン・デル・フォーゲルヴァイデは、その作品から推察される限り、先のゴットフリートほど楽観主義者ではない。ヴァルターの省察によれば、世俗の名誉と財貨は、神の恩寵である永遠の生とは相容れない。聖書は言う。金持ちが天国に入るのは、ラクダが針の穴を通ることよりもむつかしいと。宗教的要求と世俗的要求は、どこまでも対立しあうものであって、決してバランスよく調和できるものではない、とヴァルターは考える。彼はゴットフリートとは異なって、現実の世界で融和しえないこの両者を、文芸という虚構の世界においても融和させようとはしない。どんなに虚構のベールをかぶせても、決して隠しおおせぬほどに、両者の矛盾は彼にとって厳然たる事実であったからだ。

Ich saz ûf eime steine,
und dahte bein mit beine:
dar ûf satzt ich den ellenbogen:
ich hete in mîne hant gesmogen
daz kinne und ein mîn wange.
dô dâhte ich mir vil ange,
wie man zer welte solte leben:
deheinen rât kond ich gegeben,
wie man driu dinc erwurbe,

der keines niht verdurbe.
diu zwei sint êre und varnde guot,
daz dicke ein ander schaden tuot:
daz dritte ist gotes hulde,
der zweier übergulde.
die wolte ich gerne in einen schrin.
jâ leider desn mac niht gesin,
daz guot und weltlich êre
und gotes hulde mêre
zesamene in ein herze komen.¹⁷⁾

《私は石の上に腰をかけ、足を組んでいた。その足の上に肘をつき、頬杖をついた。そのとき私は深く省察してみた。人はこの世をいかに生きるべきかと。三つのものを、そのうちの一つも失うことなく、わがものとするにはどうすればよいのか、私は良い考えを生み出すことができなかった。二つは名誉と財貨であるが、両者はしばしば損害を与えあう。三つめは神の恩寵で、先の二つよりはるかに高い価値をもつ。これら三つを、私は一つの箱に収めたい。しかし誠に残念だが、世俗の名誉と財貨、そして神の恩寵が、一つの心に融合することはありえないのだ。》

そもそも宮廷で理想とされる騎士は、どのようなイメージを与える存在であろうか。生まれ尊く、非の打ち所がないほど美しい容貌容姿を具え、心は善良で誠実、吝嗇とは無縁で、施与を惜しむことは露ほどもない。英知に優れ、正義を愛し、常に節度を守って行動する。確かな分別に支えられた言葉遣いができ、読み書きには何の支障もない。自分で作詞作曲を行ない、歌唱と楽器の演奏も十分にこなす。いくつもの外国語に通じており、七自由学芸の学問的教養も申し分ない。狩りの技は巧みで、獲物の調理法にも詳しい。戦いにおいては勇気に欠ける所がなく、武器の扱い方にも卓

越したものがあつた。馬術、馬上槍試合、陸上競技でも、決して負けることを知らぬ。しかし理想とされる騎士としては、これだけではまだ十分とは言えない。それらに加えて更に、宮廷の礼儀作法に適うみやびな振る舞い、その騎士の近くにいるだけで心楽しくなるほどの歡ばしい雰囲気、婦人の前で見せる優美な物腰なども、十分に身につけていなければならぬ。このような宮廷の高雅の教えを、宮廷詩人達は *vuoge* 「礼儀作法」、*zuht* 「矜」、*hövescheit* 「宮廷のみやび」という概念語で表現する。更に *hövescheit* が完全であるためには、*vreude* 「華やいだ気分」*frô* 「朗らかな」という語が表わすものを、宮廷の人々の心に惹き起こさなければならぬ。*frô* は、貧しくて厳しい宮廷生活の中にあつて、祝宴を経験するときの興奮した気持ち、高揚した意識、華やいだ楽しい心の状態を表わす。この語を、ゴットフリートは『トリスタンとイゾルデ』の中で、*höfisch* と並べて用いている (V 5043)。*höfisch* は *hövescheit* が派生したものと形容詞であり、*vreude* と一部共通の概念をもつ。ハルトマンは『グレゴリウス』の中で、幸運の女神がグレゴリウスを、自分の好みの姿と美質に作りあげたことを、次のように説明する。そこでは *zuht* と *(ge)vuoge* が、重要な徳目として挙げられる。

Nû hete diu vrouwe Sælecheit
 allen wîs an in geleit
 ir vil stætigez marc.
 er was schœne unde starc,
 er was getriuwe unde guot
 und hete geduldigen muot.
 er hete künste genuoge:
 zuht unde gevuoge.
 er hete unredelichen zorn
 mit senftem muote verkorn.

⋮

er entet niht âne vürgedanc,
als im diu wisheit gebôt:
des enwart er nie schamerôt
von deheiner siner getât.
er suochte gnâde unde rât
zallen ziten an got
und behielt starke sin gebot.¹⁸⁾

《幸運の女神はあらゆる面で、彼女の不変の特性をこの子（グレゴリーウス）に与えていた。彼は美丈夫で体も頑健、信頼できるし有能で、忍耐心も持ちあわせていた。教養も十分に身に備え、躰や礼儀作法も完璧であった。穏やかな心ばえであったから、理不尽な怒りにとらわれることもなかった。……グレゴリーウスは分別が命じた通り、どのような事も熟慮せずには断行しなかった。それゆえ、彼が自分の行為に赤面することなど、決してありえなかった。またいつも神に恵みをお願いし、助けを乞い求めて、神の命令を固く守った。》

多くの詩人が、*vuoge* と *zuht* を対にして用いるのであるが、ゴットフリートは『トリスタンとイゾルデ』の中で、*hövescheit* と *vuoge* を対にして用いる。¹⁹⁾ このことから、*zuht* と *hövescheit* も、類似した概念であることが想定される。²⁰⁾ 宮廷を意味する *hof* から派生した *hövescheit* を、王妃に対するみやびな宮廷的態度に応用したのは、ゴットフリートである。

In der wile ez dô geschach,
daz ein pfaffe dar in kam

und sine vuoge vernam
an handen unde an munde.
wan er ouch selbe kunde
list unde kunst genuoge,
mit handen manege vuoge
an iegelichem seitpil
und kunde ouch vremeder spräche vil.
an vuoge unde an höfscheit
haete er gewendet unde geleit
sine tage und sine sinne.
der was der küniginne
meister unde gesinde
und haete sî von kinde
gewitzeget sêre
an maneger guoten lêre,
mit manegem vremedem liste,
den sî von im wiste.²¹⁾

《すると、たまたま一人の聖職者が、トリスタンのいる部屋に入
って来て、彼の手による演奏と口による歌唱が卓越しているの
を見てとった。というのは、その聖職者自身も様々な知識と技芸を
身につけており、どんな楽器をも演奏することができ、また数多
の外国語もマスターしていたからだ。彼は礼儀作法と宮廷の雅び
を身につけることに、その生涯と全霊を捧げていた。彼は王妃に
とって師であり、同時に従者でもあった。彼は彼女に、彼女の幼
少の頃から多くの立派な教えを授け、彼女は彼から、あれこれの
珍しい知識を得た。》

騎士達に frô と vreude に満たされた心を抱かせるためには、主君があ
らゆる徳操を体現し、彼らに対して施与を惜しむことなく高雅な対応をし
なければならない。そのように振る舞うなら、主君は宮廷で快く称賛され、

社会的名誉を思うがままに獲得できる。このような世俗的価値を、キリスト教会は決して認めようとしないので、当時の詩人達はこれを、宗教的価値に巧みに調和させた。即ち詩人達が求める宮廷の理想とは、世俗的価値と宗教的価値の両方を、矛盾なく実現することである。一方で神に帰依して天国に迎えられることを目ざし、他方で現世の名誉にも関心を抱いて、世俗の名望を獲得しようとして行動する。聖職に関係していない多くの詩人達は、これまであまり評価されなかった世俗的価値に、十分な権利を保証しようとした。ヴォルフラムは『パルツィヴァル』の最後で、神の寵愛が得られると同時に、現世の名誉も得られたら、そのときにこそ苦しみ喜びに変容すると説く。この助言によって、既に両方の価値を認識している貴婦人達から、詩人は尊敬を一身に集められるものと確信していることが明らかになる。

swes leben sich sô verendet,
 daz got niht wirt gepfendet
 der sêle durch des libes schulde,
 und der doch der werlde hulde
 behalten kan mit werdekeit,
 daz ist ein nütziu arbeit.
 guotiu wîp, hânt die sin,
 deste werder ich ein bin,
 ob mir deheiniu guotes gan,
 sît ich diz maere volsprochen hân.²²⁾

《人がその生涯を閉じるとき、肉体の罪のせいで神の手から魂が担保に取られることもなく、また現世の誉れも立派に守れるのなら、それは報われる苦勞である。分別の備わった立派な婦人達が、私に好意を示して下さるなら、この物語を語り終えた今、私をな
 お一層のこと高く評価して下さることでしょう。》

ヴォルフラムは、宗教的価値に世俗的価値を対置したというよりは、むしろそれを更に進めて、両者を融和したと言ってよい。しかしこの詩人より 30 年も前に、もう既にこれに類する宮廷道徳を説いた格言詩人がいた。遍歴歌人としての自分の窮迫した状況を、詩の中に痛々しく読み込み、その訴えに応えようとしぬ主君を鋭く批判したヘルガーである。この格言詩人は、上述のハインリヒ・フォン・メルクの訴えと同じように、宮廷貴族達が貞淑な妻を裏切って、遊蕩にふけっている状況に警告を発した後で、ヴォルフラムよりも辛辣な倫理的発言を行なう。世俗的価値である *êre* ばかりを求めていると、そこに悪徳の慢心がはびこりやすい。それゆえ、宗教的価値である良き魂にも心に向け、神の寵愛を失わないようにすべきである。さもなくば永遠の生を得られず、地獄への道をひたすら歩むことになる、とヘルガーは衷心から忠告を与える。

Ein man sol haben êre
und sol iedoch der sêle
under wîlen wesen guot,
daz in dehein sin übermuot
Verleite niht ze verre,
Swenne er urloubes ger,
daz ez im an dem wege niht enwerre.²³⁾

《人は名望を得なければならぬが、時には魂にも心尽くすべきだ。そうするのは彼が、傲慢のために道を踏み誤らないようにするためである。彼がこの世から去っていくときに、天国への道で邪魔されないようにするためである。》

5 ドイツ中世、特に 12、13 世紀の宮廷社会が理想としたイメージを、当時のいくつものジャンルの作品からの引用で、ここに炙り出してみた。

それはとりもなおさず当時の宮廷道徳，つまり騎士道と貴婦人のみやびな作法に，照明を当てる作業であった。しかしこのような騎士道の理想的イメージは，すべてがドイツで自然発生したものというわけではない。むしろその多くが，フランス語の原典を中高ドイツ語に翻訳するときに，ドイツに移入されたものである。宮廷におけるみやびな作法は，フランスやイギリスの宮廷で，長い年月を経て徐々に育っていった。しかしドイツでは 12 世紀後半に，それは原典翻訳とともにフランスから一挙に移植された。その際ドイツ側は，フランス文芸のあらゆるジャンルやモチーフを，均一に移植したのではなくて，なかでもとりわけ新しい愛の形と新しい騎士道に，特別な関心を寄せた。しかも，フランスより一層倫理性，道徳性を強めた形で，それらの理想像を作りあげていった。

格言詩人のみならず，恋の歌や叙事詩を創作した詩人達の口にもものぼる道徳訓は，概して世俗的騎士道と宗教的騎士道から成る。前者のみを説く詩人は評価されぬが，後者のみを説く詩人は，かなりの影響力をもっていた。しかし当時の総体としての騎士道を，最も特徴あるものにしたのは，見事に両者の調和をはかり融合させた詩人達である。彼らのこのような文芸活動には，中世のこの当時の社会に世俗化の波が，既に相当の勢いで押し寄せていた事実が示されている。²⁴⁾ それと同時に，世俗文化の新しい価値観を，支配的であろうとした宗教的価値観につきつけるという時代の変化が，ここに現われている。²⁵⁾ ヴァルターのように，文芸という虚構の世界においても，両道徳を融合できないものとする詩人もいたが，それはむしろ少数派であった。多くの詩人達は，従来から教会側が要求してきた宗教道徳に，宮廷側が要求する世俗道徳を取り込んで，新しい宮廷道徳を打ちたてた。そのために詩人達が払った情熱と熟慮は，古フランス語 *cor-teisie* の翻訳語である *hövescheit* と，同じくフランス語からの借用語である *moräliteit* という二つの新語に，最も明確に現われていると言って

よい。そのことを多数の引用によって例証することが、この論攷の目的であった。

注

- 1) ヨーロッパ中世、特に 13 世紀の宮廷像の概観を、以下の引用テキストの他に次の著書からも得た。
Helmut de Boor (hrsg.): Die höfische Literatur. Vorbereitung, Blüte, Ausklang (1170-1250) in ‚Geschichte der deutschen Literatur‘ begründet von Helmut de Boor und Richard Newald, Band II. München, 1979.
Joachim Bumke: Höfische Kultur — Literatur und Gesellschaft im hohen Mittelalter. 2 Bde. München, 1986.
Otto Borst: Alltagsleben im Mittelalter. Frankfurt a. M., 1983.
- 2) Richard Heinzel (hrsg.): Heinrich von Melk. Hildesheim, 1983. V. 354-358.
- 3) Heinrich Rückert (hrsg.): Der wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria. Berlin, 1965. V. 7765-7784.
- 4) Ebd. Der wälsche Gast, V. 7785-7800.
- 5) Ebd. Der wälsche Gast, V. 7801-7820.
- 6) Hugo Moser/Helmut Tervooren (hrsg.): Des Minnesangs Frühling, I. Texte. 37. Auflage, Stuttgart, 1982. 209, 25-36.
- 7) Ebd. Des Minnesangs Frühling, 209, 37 - 210, 10.
- 8) Werner Schröder (hrsg.): Wolfram von Eschenbach: Willehalm. Berlin, 1989. 299, 13-27.
- 9) Ebd. Der wälsche Gast, V. 11620-11638.
- 10) Karl Lachmann/Wolfgang Spiewok (hrsg.): Wolfram von Eschenbach: Parzival. Reclam 3681, Stuttgart, 1981. 170, 23-28.
- 11) Friedrich Ranke/Rüdiger Krohn (hrsg.): Gottfried von Straßburg: Tristan. Reclam 4471, Stuttgart, 1980. V. 5022-5032.
- 12) Ebd. Parzival 321, 23-30.
- 13) Ebd. Der wälsche Gast, V. 1815-1822.
- 14) Ebd. Der wälsche Gast, V. 12333-12340.
- 15) Friedrich Ranke/Rüdiger Krohn (hrsg.): Gottfried von Straßburg: Tristan. Reclam 4472, Stuttgart, 1980. V. 17997-18020.
- 16) Ebd. Tristan, V. 8002-8026.

- 17) Karl Lachmann/Carl von Kraus/Hugo Kuhn (hrsg.): Walther von der Vogelweide, Gedichte. 13. Ausgabe, Berlin, 1965. 8, 4-22.
- 18) Friedrich Neumann (hrsg.): Hartmann von Aue: Gregorius. Reclam 1787, Stuttgart, 1959. V. 1235-1262.
- 19) Ebd. Der wälsche Gast, V. 838, 6399 でも、 hüfſch と gevuoc が並置されている。
- 20) Ebd. Der wälsche Gast, V. 657, 1359, 1708, 8710 でも、 zuht と hüfſcheit が並置されている。更に、 V. 687-695 では zuht, hüfſch, gevuoc が互いに近くに位置しており、それらが類似概念で用いられていることを暗示している。
- 21) Ebd. Tristan, V. 7696-7714.
- 22) Karl Lachmann/Wolfgang Spiewok (hrsg.): Wolfram von Eschenbach: Parzival. Reclam 3682, Stuttgart, 1981. 827, 19-28.
- 23) Ebd. Des Minnesangs Frühling, 29, 34 - 30, 5.
- 24) Ebd. Alltagsleben im Mittelalter. S. 52.
- 25) Ebd. Höfische Kultur. S. 430.